

添削課題

解答例

- (1) ホットスポットで形成された火山島が太平洋プレートにより北西へ移動し、火山活動停止後サンゴ礁を形成し沈降して環礁となる。(59字)
- (2) 面積が狭く資源の埋蔵に恵まれず土壌も農業に不適で、点在する島々のインフラの整備も遅れ国内での経済開発が困難である。(58字)
- (3) いずれも最大干潮線を基準とし12海里までの領海は沿岸国の主権が及び、200海里までの排他的経済水域は船舶の自由航行は可能だが、資源開発の権利と環境保全の義務は沿岸国が持つ海域である。(89字)
- (4) a - 南鳥島      b - 沖ノ鳥島
- (5) 夏季に、小笠原諸島は太平洋高気圧の影響で晴天が多く、南西諸島は梅雨前線や台風及び南東季節風の影響で降水量が多くなる。

解説

- (1) 図 1 - 1 における太平洋中央部の北西から南東の方向に連なる火山島とサンゴ礁とは、ハワイ諸島とその周辺地域を指している。頭上の位置が北回帰線付近であることから判断ができよう。これらの島々が列状に北西から南東の方向に並ぶ理由が問われているが、ここに形成されているのが火山島だけではなく、サンゴ礁島もあること、またサンゴ礁島は列状に並ぶ島々の西側に多く、反対に火山島は東側に多いことにも注目したい。

ハワイ諸島は、プレート境界の東太平洋海嶺から離れたプレート内部に形成された火山である。通常、火山はプレート境界に形成されることが多いが、ハワイ諸島はプレート（リソスフェア）より下のホットスポットの上に形成された火山島である。この火山島をのせた太平洋プレートは北西の方向に移動しているため、ホットスポット上で形成された火山は徐々に北西の方向に移動する。ベルトコンベアーの上に乗った砂山を想像すると良いだろう。現在のホットスポットはハワイ島の下にあると考えられ、そのためハワイ島はハワイ諸島の中で最も火山活動が盛んな場所となっている。逆に最も北西に位置するニイハウ島やカウアイ島の火山活動は鎮静化しつつある。このホットスポットからずれた北西側の島々では次第に火山活動が停止し、島の沈降が起きると沿岸部に形成されたサンゴ地形は裾礁から堡礁、環礁へとその形態を変化させていくことになる。そのため太平洋の西側の海域では環礁などの古いサンゴ地形が形成されている。

解答に際しては島嶼が北西から南東の方向に列状に形成されているのは、海洋プレートの太平洋プレートと進行方向とに関係があること、および火山島が南東側に多いのはホットスポットと関係があり、ここから次第に離れるにつれてサンゴ礁島が多くなることを述べていくことが肝要である。

- (2) 小島嶼国において、先進国からの経済支援や出稼ぎによる本国への送金が多いのは国内の経済活動が困難なためであろう。大陸部の面積の大きな国とは異なり、農用地を得るにも工業用地を得るにも不利になる。一部の島嶼国ではサトウキビのプランテーション農業などが発達したが、島嶼がサンゴ礁で形成されている場合、石灰岩によって形成されている土壌は農業に適さず、農業経営は自給的で土地生産性の向上も難しい。また国土面積が小さいとい

うことは人口の扶養能力も低くなるため、国内の商品市場および労働力市場の拡大にも限界がある。市場が未発達な場合、資本の蓄積や流通網の形成も進みにくく経済開発に支障が生じる。また国土がいくつかの島々で形成される場合も、交通網や流通網の整備が行き届かないであろう。水産業においても資本の少なさから大規模な経営には至らず自給的であり、島の面積が小さければ、当然、領海や排他的経済水域の面積も小さくなり水産資源の確保や開発に問題が生じる。

このように面積の小さい島諸国では先進国からの経済支援や移民、出稼ぎ労働者からの送金に依存し、経済的自立が困難であることを的確に述べると良いであろう。

- (3) 排他的経済水域と領海の違いを説明する指定語句付きの問題である。領海は、領土・領空と共に国家の全ての主権が及ぶ範囲である領域を構成する要素である。一般に国家の主権とは国家の統治権を指し、他国の支配に服さない最高独立性、対外主権、国家の政治の在り方を最終的に決める権利などの内容が含まれている。こうした概念は、近代以降、国家間の関係つまり国際関係は、個人や法人企業ではなく国家によって形成されるという主権国家体制のなかで尊重されてきた。領海とは国家主権を海域の中でどのように扱うのかということになるが、沿岸国においては最大干潮線を基線とし沿岸12海里（海里とは海上の距離を示す単位。国際海里は1852mで、元は緯度1分に相当する長さである）までが領海の範囲である。19世紀においては最大射程距離を持つ戦艦の艦砲からの着弾距離で決定され、当初は3海里だったものが6海里、12海里へと延長されてきた。現在では領海12海里は国家の安全保障上の海上距離とは言い難いものになっている。

一方の排他的経済水域は、国際社会で資源ナショナリズムの考え方が一般的になるにつれて、沿岸国が他国に対して主張してきた考え方である。1960年代に産油国は自国の天然資源に対する主権の確立を主張し、OPECやOAPECなどの石油カルテルを形成してきた。これは国内の原油などの天然資源が独立後も旧宗主国の資本などにより独占的に開発されている状況を打破するために唱えられた考え方であった。原油以外にも鉄鉱石・ボーキサイト・銅鉱石などの産出国でも同様の動向が見られ、1970年代には第4次中東戦争を契機として1973年には第1次石油危機が発生した。この際、沿岸国では自国の沿岸海域での水産資源や海底の鉱産資源の開発に対する他国の規制を図ることを目的に、最大干潮線から200海里間での海域における排他的経済水域の設定が行われた。この海域においては外国船舶の航行の自由は認められるが、水産資源や海洋底の鉱産資源などの管理は沿岸国が行い、合意が無い場合は他国の排他的経済水域内での経済活動は禁止される。同時に沿岸国は海洋環境の保全などの義務を負うことになっている。1982年の第3次国連海洋法会議にて採択され、1994年に発行した『海洋法に関する国際連合条約』では領海12海里、排他的経済水域200海里が明文化されている。

解答に際しては両者の概念の違いについて、指定語句を引用しつつ答えれば良い。ただし、両者の基準となる線が最大干潮線からの距離であることには注意したい。

- (4) 南鳥島は小笠原諸島の一部で、本州から1800km離れた日本の最東端の領土である。行政上は東京都小笠原村に属する。国内の島では唯一、他の島と排他的経済水域を接していない島である。マーカス島・マルカス島とも呼ばれている。日本国の領土間で最長の大圏距離をとることができる地点である。一辺が約2kmの三角形の形をした平坦な島で、最高地点の標高

は9 m, 島の周囲にはサンゴ礁が発達する。日本列島の島の中で唯一日本海溝の東側に位置し、日本列島で唯一、太平洋プレート上に位置することからプレート運動の監視に重要な地点である。南鳥島はプレート運動による動きとして西北西方向に移動しているが、2011年の東日本大震災以降、移動速度が約1割(8 cm/年→8.8cm/年)加速していることが2015年に発表された。

沖ノ鳥島は太平洋上に位置する小笠原諸島に属する孤立島で、サンゴ礁からなる島であり東京都小笠原村に属する。日本最南端の島で、その位置は北緯20度25分であり、北回帰線よりも南側に位置しているため、気候は熱帯に属す。島の周囲は約11kmで米粒型のサンゴ礁による島で環礁の形態を持つ。干潮時には環礁の大部分が海面上に現れるが、満潮時には礁池内の東小島と北小島を除いて海面下となる。

両島ともに日本の領土に関する問題では頻出のものである。とくに、それぞれが日本の排他的経済水域を形成する位置の東端と南端であることに注意したい。

- (5) ケッペンの気候区分によると小笠原諸島は、聳島列島・父島列島・母島列島・西之島が温帯に、南鳥島・沖ノ鳥島が熱帯に区分される。年間を通して暖かく、気温の年較差は小さい。春から初冬にかけて台風が接近する。しかし、5月から7月あたりにフィリピン海盆から小笠原諸島にかけて発達する高温多湿な熱帯性気団の小笠原気団(太平洋高気圧の西部にあたる)の影響を被るため、台風はこの気団の辺縁を通過し、梅雨前線も小笠原気団の北側に形成されるため、小笠原諸島には梅雨が発生しない。梅雨前線は北上する小笠原気団の暖気と、その北に位置するオホーツク海気団の冷気が接触することで形成されるため、小笠原気団の発達する位置より南にある小笠原諸島はこの前線の影響から免れる。また台風は熱帯低気圧であり、高気圧である小笠原気団の西側の辺縁部を北上し、その後偏西風の影響によって東進するため、小笠原諸島は台風の進路から外れるケースが多い。

南西諸島の気候は、ケッペンの気候区分によれば西日本と同じ温暖湿潤気候に属する。しかし、海洋に囲まれ日本海流の影響が強くと、那覇市の年平均気温は約23℃になるなど、一年の大半は温暖で四季の変化も不明瞭であることから、熱帯と温帯の間として亜熱帯気候などと呼ばれる。南西諸島の降水量の約6割に該当するのが台風を原因とするものであるが、梅雨前線の活動も活発である。夏季に発達するインドシナ半島からの温暖で湿潤なモンスーンが南西諸島付近に到達し、冷涼な北側の気団と接触して積乱雲が頻繁に形成されそれが梅雨前線に発達するため、南西諸島の梅雨入りは本州よりも早く平年で5月9日、梅雨明けも本州より早く平年で6月23日となっている。この後7月から10月にかけての台風の接近期に降水量が再び多くなる。前述のように台風は、小笠原諸島を中心に発達する太平洋高気圧(小笠原気団)の西縁を北上することが多く、この高気圧の西縁付近に南西諸島が位置するため台風に伴う降水量が多くなる。

解答に際しては、小笠原諸島は梅雨前線や台風による降水の影響が少ないが、逆に南西諸島はその影響を強く被るところに両者の降水量の差が生じる原因があることを、明確に述べていきたい。